

地域におけるインフォーマルな社会的ネットワークの形成と主観的効果

— 新たな友人・知人を獲得した高齢者の心理的ウェルビーイング —

○ 和洋女子大学 岡本 秀明 (03826)

[キーワード] 社会的ネットワーク、高齢期の友人・知人の獲得、心理的ウェルビーイング

1. 研究目的

社会福祉基礎構造改革および社会福祉法の制定により、地域福祉は社会福祉の重要な基礎の1つとなった。近年、地域における人と人とのつながりや絆の大切さが特に言及されるようになった。地域の高齢者に関して、独居高齢者の増加とその見守り、社会的孤立、孤立死への関心が高まり、あらためて、地域における社会的ネットワークが重要視されている。地域の高齢者を取り巻くインフォーマルな社会的ネットワークは、その主観的効果を検証するため、近隣・友人数、支援の受領・提供の有無や頻度などと心理的ウェルビーイングの関連を検討した研究が多数蓄積されつつある。しかしながら、新たな友人・知人の獲得に着目しておこなった研究はまだ少ない。そこで本研究では、高齢者を対象に、従来の研究でよくみられるような親しい近隣や友人の数に加え、新たな友人・知人の獲得の有無にも着目し、心理的ウェルビーイングとの関連性を検討することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

千葉県都市部の4市に居住する65～79歳の計2,000人を住民基本台帳から無作為抽出し、2010年に郵送調査を行った。有効回答数(率)は1067人(53.4%)であった。分析対象者数は、代理回答を除外するなどにより932人となった。分析対象者の基本属性は、平均年齢が71.1歳、性別は男性が51.2%、女性が48.8%であった。

調査項目と変数について、社会的ネットワークは、まず、親しい友人・仲間の数、親しい近所の人数を設けた。それぞれ、0人～9人以上の6件法でたずね、低位群(=0人)、中位群、高位群の3群に分類し、低位群を基準とした2つのダミー変数を作成した。次に、新たな友人・知人の獲得の有無について、年内(過去約8ヵ月間)に新たな友人ができたかどうか、年内(同)に世間話をするような新たな知りあいができたかどうかを尋ねた。そして、それぞれ、できた者に1、そうでない者に0を付与した。心理的ウェルビーイングは、生活満足度(LSIK; 得点範囲は0～9点)、4項目の「日頃の活動満足度尺度」(4～20点)、友人、学習、他者・社会への貢献、健康・体力に関する満足度の4下位尺度(因子)計14項目の「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」(14～70点)の3つを使用した。分析は重回帰分析を用いた。従属変数は、心理的ウェルビーイングの各得点、独立変数は社会的ネットワークそれぞれ1つずつ、統制変数は、年齢、性別、配偶者、IADL、経

済的暮らし向きとした。

3. 倫理的配慮

回答データは統計的处理し個人を特定しない、調査は強制ではないなどを協力依頼文書に明記した。調査票の返送をもって調査協力への同意とみなした。

4. 研究結果

単純集計結果について、親しい友人・仲間の数は3~4人との回答(24.5%)が、親しい近所の人の数は3~4人との回答(24.6%)が最も多かった。新たな友人を得た者は23.9%、新たな知りあいを得た者は25.8%であった。生活満足度の平均点は5.2点、日頃の活動満足度の平均点は14.7点、社会活動に関連する過ごし方満足度の平均点は46.3点であった。

新たな友人を得たか、新たな知りあいを得たか、その有無と基本属性等(年齢、性、家族形態、IADL)との関連性をt検定または χ^2 検定により検討したところ、いずれにおいても有意な関連性はみられなかった。

重回帰分析の結果、親しい友人・仲間の数および親しい近所の人の数について、生活満足度との関連では、低位群と比較して高位群のほうが有意に高く、日頃の活動満足度および社会活動に関連する過ごし方満足度との関連では、低位群と比較して中位群および高位群のほうが有意に高かった。新たな友人を得た者は、そうでない者と比較して、生活満足度、日頃の活動満足度および社会活動に関連する過ごし方満足度のいずれの得点も有意に高かった。新しい知りあいのできた者は、そうでない者と比較して、生活満足度との有意な関連がみられなかったが、日頃の活動満足度および社会活動に関連する過ごし方満足度は有意に高くなっていた。

5. 考察

新たな友人・知人を獲得した高齢者の割合は、それぞれ4分の1程度に達しており、もちろん調査協力が得られた高齢者に限定されるが、高齢期においても新たな友人・知人のネットワークが形成される場合が少なくないことが示唆された。新たな知人の獲得と心理的ウェルビーイングの3変数の検討の結果、有意な関連は2変数にとどまったが、新たな友人の獲得の場合には、3変数すべてと有意な関連がみられた。知人よりも友人のほうが、相手に対する親しみやつながりの深さ、信頼性が高いため、妥当な結果と考えられる。日頃の活動満足度および社会活動に関連する過ごし方満足度の双方には、新たな友人・知人の獲得それぞれが有意に関連していた。生活満足度が生活全般や人生全体を把握するのに対し、それらの2つの尺度は友人や知人とかかわりながらの余暇的な活動にも着目した満足度の尺度であるため、新たな友人・知人の獲得による主観的効果を把握しやすかったことが推察される。[本研究は科学研究費補助金(22730444)の助成を受けて行った。]